

幼稚園と尋常一年との聯絡について

東京府女師附屬主事 木下 一雄

一 はしがき

幼稚園と尋常一學年との生活を一層密接なる關係に置いて、その教育の上に統一と協同と聯絡とを保持しむることは、今日この方面の教育者の十分考へねばならぬ所である。正當な理解を以てすれば、幼稚園と尋常一年の課程は、寧ろ截然たる區劃のなされないのが自然である。遊戲手技觀察談話唱歌等の保育項目はかつて幼稚園の特別の課程の様に考へられて居たが、これらは當然尋常一年の課程にまで繼續せらるべきものである。反對に讀むこと、算へること等はこれまでの幼稚園の幼兒に不適當な仕事と見做されて居たやうであるが、これとて幼兒の精神年齢にして受容に適すと認定された時は、これを取扱つて一向差支ないものと考へられる。勿論こゝに讀むといふのは、ルソーが懸念した様に、幼兒を苦しませるものであつてはならぬ。讀むことに喜びを持つやうであれば、童話や童謠を聽く經驗と同じになるのである。

現時の幼稚園は幼兒の生活に於て既に社會的經驗を與へようとして居るが、小學校の教育も亦當然社

會生活の本質的基礎といふことを考へて居る。幼稚園教育と小學校教育との立場には、必然的な矛盾は存しないのである。

二 幼稚園及び尋常一年の教育を歴史的に見て

幼稚園及び尋常一年の教育を連絡せしむることについては、既に一九〇七—八年、米國がこれを中心問題として教育協會の年報に發表して居る。同時にこの問題に對する解決の方法として科學的研究がなされ、殊に幼兒の精神年齢の研究は有力な材料を提供しつゝあるのである。こゝに順序として(一)これまでの尋常一年の教育(二)幼稚園として獨立に考へられたる教育(三)幼稚園及び尋常一年の聯絡を考慮せる教育を歴史的に述べることとする。

(一)在來の考へ方による尋常一年の教育は、二つの動機を持つて居た。その一は實科的の方面で、他は宗教的の方面である。而して何れも最初小學校の設立に際して、社會生活といふことをその背景に置いたものである。

實科的の動機は中世の都市に於て初めて見るものであつて、商業都市の發展すると共に、商人が學校に讀むこと書くこと算へることの習得を要求したものであつた。これらの學校には公立のものも多いがまた牧師學者にして一定の職を持つて居ないもの、或は信仰篤き婦人等の私に設立するものもあつた。主として讀んだり書いたり算へたりすることを教授したものである。女子の教員は一三六二年頃にスバ

ニイルに初めて置かれた。

宗教的動機によつて小學校を設立したものは、無論新教舊教の教會である。舊教の小學校の最初に設立されたのは一六八四年であつて、フランスの教會によつて創められたものである。實科的及び宗教的動機に基いて設立された小學校は、讀方算術等を社會生活の準備として見て居る。然し時代の推移と共に、多少の變化があつた。即ち米國にあつては宗教的動機は牧師の經營する學校にのみ尙存するのであつて、多くは讀方書方算術の教授のために主力を注ぎ、宗教は全く等閑視さるゝに至つたのである。反對によき公民として立ち得るため等の目的からして、讀方算術等が大いに重んぜらるゝに至つた。而してこれらの動機はたとひ實科的のものであつても、或は宗教的、公民的のものであつても、何れも社會に立つための普通の知識といふべきものであつて、幼稚園の初めのもの及びその發達の模様に於て、これと根本的に異なる目的が認められるのであつた。これ久しく幼稚園と尋常一年の教育が聯絡し得なかつた所以である。

(二)幼稚園と尋常一年との對照は、ルソーの言葉によつて明かに示される。ルソーは次ぎの如く述べて居る。教育について多くの人達の考ふる所は、何々が重要な知識であるといふことであつて、それが子供に理解し得るものであるかどうかは問題にされて居ないのである。即ち教育は常に子供に大人になすべきことを求め、子供が大人になる以前に、如何なる事情にあるかいふことは考慮されなかつたので

ある。教育は最初に子供そのものを中心となすべきであると。

かやうにしてルソーは教育をなす場合に、先づ子供の本能、能力、心身の要求、年齢に相應して可能なる作業を考へたのである。決して「何々が授くべき重要な知識である」といふ様な事を云はなかつた。ルソーのこの初等教育に對する新しい思想は、忽ち幼稚園教育の基礎に置かるゝに至つた。即ちフレールは一八三七年、この思想に基いてブランケンブルグに初めの幼稚園を設立した。フレールの教育の原理は三つに纏められる。その一は模倣である。元來子供は大人の活動を模倣することに興味を持つものである。まゝごと遊びや店屋の眞似をするのはそれであるが、これによつて幼兒は有益な社會的觀念や慣習等を自然的に自分のものにするのが出来るのである。その二は表現である。この年頃の幼兒は砂や粘土で様々の物の形を作り、或は木等を組立てることに興味を持つものである。その他圖畫唱歌スキップ等もすべて活動的なものを喜んで居る。さればこれらの活動を通して藝術的の趣味を養ひ、或は創造工夫の研究を積まじむることも出来るのである。その三は遊戯である。遊戯を子供が喜ぶことはこゝに述べる要がない。しかも組織的な遊戯は自然に多くの知識材料を含んで居り、また道德的價値を多分に持つて居るのである。

これらの原理はルソーの初め述べたやうに、實際に子供に對する觀察より得られたもので、眞に幼兒教育の主眼となすべきものである。幼兒教育の原理をかく叙述することによつて、我々は幼稚園と尋常

一年の教育を劃然對照せしむる事が出来る。これまでの尋常一年の教育に於ては、全體としての努力がたゞ「大きくなつてからためになる」といふことに向けられて居たのであつて、子供の模倣や遊戯活動の中に見出さるゝ適當な發展や學習の可能性の如きは、殆ど顧慮されて居なかつたのである。

但し我々は次ぎの事を考へねばならぬ。即ち象徴主義の目標はフレーベル以後久しく幼稚園の中心要素となつて居た爲め、今日では幼稚園が象徴主義を採ると否とによつて、保守的と進歩的とに分れることである。今日尙象徴主義を採用する幼稚園は、尋常一年の教育とそのまま圓滑に聯絡することは困難である。何となればこれまでの尋常一年はたゞ讀んだり書いたり實際の習得を一般的目的として居るのに對し、幼稚園は象徴主義の神秘的な理想を著しく示すからである。これに反して進歩せる幼稚園は既に尋常一年の教育の精神をも採用して、こゝにその聯絡を求めんとして居るものである。

(三)幼稚園と尋常一年と聯絡される場合は、次ぎの四つの點に於て見出すことが出来る。第一幼稚園の生活を尋常一年までに擴張すること、第二尋常一年の生活を幼稚園まで下に擴張すること、第三幼稚園及び尋常一年を共通にして精神年齢を顧慮すること、第四幼稚園及び尋常一年を統合して訓練課の組織を考ふることに、即ちこれである。

第一幼稚園の生活を尋常一年までに上に擴張すること、この場合に於ては少くとも幼稚園の方面より尋常一年に向つて改良を要求すべきことがある。その一は尋常一年の兒童をして一層活動的に遊戯的に仕

事をなさしむること、その二は尋常一年の教科目の教授を幼稚園と聯絡せしむる事、その三は幼稚園にある教科目を新しく加ふること等である。幼稚園を參觀する小學校の先生は、恐らく幼稚園教育に於て子供の活動すること、子供の興味や要求が常に洞察されて居ることに、深き印象を持つであらう。實際に於て子供の仕事に對する態度は活動的であり、その興味は自發的である。遊戯や體操は少しも秩序を亂すこともなくて、且極めて自由である。幼稚園の教育の特質は多少なりとも小學校に採用さるべきものである。これに鑑みて米國シカゴ大學教授デューイの監督の下にある小學校は、尋常一年を幼稚園教育の原理に基かして、幼稚園の精神及び生活を採用して居るのである。

第二尋常一年の生活を幼稚園に及ぼすこと、この場合には尋常一年の教科目をいかに幼稚園に移すかといふことが問題である。

算術は算へたり計つたりする形式に於ては、寧ろ幼稚園の方が尋常一年より發達して居る場合が多いと云つてよい。即ち幼稚園の手技や遊戯には算へたり計つたりする機會が多いのである。子供は單純なる數を直ちに實際に使用することを容易にする。然るに尋常一年の算術は却つて實際に數を用ふる機會が少ない位である。フレーベルの幼稚園は明かに數を取扱つて居る。尋常一年の算術的の考方を幼稚園に入れるのは、左程の困難のことではない。

書方については少しくこれと事情を異にするものがある。手の微細な運動は尋常一年に於ても困難と

するものである故、幼稚園にあつては無論不適當な要求と見られるのである。

讀方の教授はこれまでの幼稚園で小學校との聯絡を考へなかつたものには無論見出すことが出来ない。然し既に讀み方をなし得る能力ある幼兒に對しては、これをなすことが却つて價値があるのである。但し精神能力の低い幼兒に不適當なることはいふを要しないことである。それは尋常一年の智能の低い兒童に對する場合も同様である。而して幼稚園に讀方を入れることは、算術や書方を考へる場合より複雑な關係が存するのである。この問題については、これまでの聯絡のなかつた尋常一年と幼稚園とについて考へられた教育の事實を適用することが便利である。即ち一方に讀むことを普通の知識を得ること、見、他方に幼稚園の幼兒にしてその精神能力の高きものに、心理的に適合せしめようとするのである。

これまでの尋常一年の讀方教授を見ると、明かに小學校が社會的要求を以て讀方を課して居ることが分る。而してそれは少くも眞理である。實生活の場合のみならず、これを理想的な宗教や公民生活の事實に徴するも當然なる要求と見てよい。併しながらこれを直ちに幼稚園に移す時は、先きにルソーについて述べた如く、讀方は寧ろ幼兒を苦ましむる材料となるものである。こゝに於て幼稚園の讀方は理想として次ぎの様なものにならなければならぬ。「讀方によつて幼兒の生活に大なる興味を喚起し、彼等の經驗を豊富にする」と。(未完)

附記 多少體系を整へたいと思ひましたので、分りきつたことも書いて仕舞ひました。尙二三回にて

完結したいと思ひます。